

## 一節 求道の目的と意義

求道（きゆうどう）とは、岩波の国語辞典によれば、「神の道を求めて修行すること」である、と説明されている。これを仏教的に求道（ぐどう）と呼ぶ場合には、「仏の正しい道を求めること。転じて、人の世の道理を求めること」と説明が変わる。道を求めると同じ表現ではあっても、その内容は必ずしも同じものではない。しかし、宗教的に「求道」という文字を使う場合、その教派、宗派を問わず、人間の内に抱かれた精神を向上させるために取り組まれるもの、といった意味で使われるのが一般的であろう。

本書は神道の立場をとっているので、求道とは、神の道を求めて修行すること、と簡単に定義されたことの意味内容と、その実践法が説かれていくことになる。

第1章 第1節 求道の目的と意義

それでは神の道とはいったい何なのだろうか？ 言葉の意味から考えてみると、それは神の通る道、あるいは神の世界で守られている法（のり）といった意味合いに受け取れる。しかし、人間がそのまま神の世界に生きられるわけではないので、この場合神の道とは神への道、つまり人間が神の世界へ到達する道、と考えるのが正しい考え方であろうと思われる。

それでは、人間が神の世界の一員になるということとは、可能なことなのであるか？ 人間が神の世界に入るということは、人間が神になるということであるが、そんなことがほんとうにできるものなのだろうか？ 筆者は、人間が肉体を持つているかぎり、人間はあくまでも人間であつて神ではありえないという考え方をしているので、生身の人間は神にはなれないと言つておきたい。しかし、世に「生き神」と呼ばれる人間がいることは事実だし、現実には筆者も神々から生き神扱いされた経験をもっている。ということは、たとえ人間が神とは認めなくても、神から見ると、肉体を持つていても神と同等に扱ふことができる何かがあるということになる。そして、その何かを求めて修行することが、求道ということであるはずである。

それでは、神と同等になるまで人間を高めることができるその何かとは、いったい何なのだろうか？ 求道者が自分の人生を投げ捨ててまで求めてやまないもの、命をかけても獲得しようとするもの、それはいったい何なのだろうか？ その何かを求めることが求道の目的であり、その何かを得ることに求道の意義がある、ということになりそうである。

人間を神にまで高めるその何かとは、一般的には「魂」と呼ばれているものである。神道ではそれを「ミタマ」と呼んでいる。しかし、その魂とは本来誰で

もが持つているはずのもので、ことさらそれを求めて苦しい修行をする必要はないはずである。それでは求道者は何のために修行をするのであろうか？ それは人間なら誰もが持つている魂を、神レベルにまでみがきあげるためである。魂をみがくとそれは光りはじめる。その光が神界の神の発する光と同じような光にまで高まつたとき、人は神としての評価を受けることになる。つまり人間世界でいう「生き神」である。しかし、物質的肉体を持つているかぎり彼は人間であつて神ではない。神的人間ではあるが肉体は人間のもので、神の世界のものではないからである。しかし彼が肉体を脱ぎ捨てたとき、彼が行く世界は神界で、彼は神の一員として処遇されることになる。その意味では確かに肉体をまつた生き神であるとは言えるのである。

それでは人間を神にまで高める魂「ミタマ」とは、いったい何なのであろうか？ 自分のものであれ他人のものであれ、人間には魂などというものを見ることはできず、感じることにすらもできない。あるのかわからないかわからないそんなものを、どうしてみがくことができるのだろうか？

神秘主義的教えでは、「生命の木」というものがあることが説かれている。特にユダヤの教典の中には、生命の木というものがエデンの園に生えていて、人類の祖であるアダムとエバがその実を食べたために、樂園を追放されたと記されて

いる。このユダヤの教典は、キリスト教の旧約聖書ともされて人類世界に広まったので、生命の木という言葉自体はそれほど珍しいものではないはずである。ところがユダヤの秘教部分では、この生命の木は人間の内にあるものとされているはずである。また西洋の神秘主義的文献のなかには、人体の中にこの生命の木が生えている絵があるので、そのことの知識を持っている者も相当数あるはずである。

この生命の木と魂「ミタマとは密接なかわりがあるので、この方面から魂をみがく修行というものを考えてみることにしよう。

筆者はエデンの園へ行ったことがないので、そこに生命の木というものがあるかどうかはわからない。しかし、人間の内に生命の木というものがあるらしいということは、体験的に感じ取ってきている。もっとも直接それを見たり触れたりしたということではない。それではどういうふうになそれを実感するかというと、生命の木の種が人間の内に埋め込まれていて、それを神々がミタマと呼んでいることから、そう思われるというほどの意味で言っているだけのことではあるが。

神々は、人間のミタマを種として語ることが多い。つまり、普通の人間の内にあるミタマは種として眠っている状態にあつて、その種が人間という土壌の中でいかに芽生えて生命の木として育つかを、神々は見守っているように思われるの

である。そしてそのことが、じつは求道に深いかかわりをもっているのである。つまり、自分の肉体の中に生命の木を育てあげた者が、神の一員として神界に受け入れられることになるからである。

肉体という土壌の中で眠っている種に、いかにして水をかけて湿らせ、いかにしてその種の固い殻を割って生命の木の芽を出させるか。それが求道の第一段階である。このミタマの種が割れると、神界に生える生命の木の芽が顔を出す。その芽に神界の光が降り注がれて芽は育ち、修行という肥料を吸い込んで生命の木はどんどん成長していく。求道のたゆまぬ努力はそれを一本の木として完成させ、その木に花が咲き実がなる。それが求道の成果である。ところがユダヤの教えは、人間がそれ以上道を進めてはいけなさと教えている。つまり、生命の木に咲く花が実を結ぶことになるとしても、その実を食べてはならない。その実を食べると知恵の目が開かれて、創造主と同等の力を得ることになるので、人間はその禁を犯してはならないと説いたのである。

かつてルシファアはこの生命の木の実を食べようとして落とされ、魔界の王と化した。そして、そのことが人類の楽園追放につながった。だから生命の木の実を食べてはならない、とユダヤ人は教えたのである。しかし二十世紀末の今、日本神話でクニトコタチと呼ばれるルシファアは、再びこの実を食べようとしてそ

の手を伸ばしている。創造神の力を得て楽園を再建するために。そして天の父神の非道を正すために。

生命の木の実を食べるといふことは、神々の住む神界を越えて、創造神のいる天上界（創造界）への入り口である根元界に入るといふことである。神界の扉を開くこともできずにもがいている求道者に、根元界の入学案内書を渡すことは無意味である。生命の木が生えてもいけないのに、その実を食べることなどできないのだから。まず生命の木を生え出させること、その前に、どうして種を割って芽を出させるかが説かれなくてはならないのである。

ところで生命の木という考え方は、西洋神秘主義的世界では一般的であつても、日本ではほとんど説かれてはこなかった。日本の神秘主義的思想、特に神道では、魂というものを「一霊四魂」という概念でとらえて、それを説明してきている。どういう説き方をしているかと言うと、人間の魂というものには直霊と呼ばれる神に直結する靈魂があつて、それが人間の各種の働きを分担して奇魂、幸魂、和魂、荒魂に分かれている、とする考え方である。この一霊四魂の考え方は、現代感覚ではなかなか理解しにくいものなので、筆者はこれを取らない。この説き方が間違いだと言つつもりはないし、この考え方はそれ相当の裏付けがあつて出されてきたものだと思う。しかし、求道生活を実践していくうえ

で、この説に実効性は感じられないのである。と言うよりもこの考え方は、神界とは違う霊界にかかわる教説であるように思われる。

中国では人間の精神を「魂」と「魄」の二文字に分けて使っている。このほうがまだわかりやすい考え方である。つまり、人間のミタマには神界次元に所属している魂と、霊界次元に所属している魄の二種類がある、ということの区分けをしているからである。この魂魄は重層していて、魂を包む形で魄が外側を覆っていると考えられる。これを生命の木の種に当てはめると、魄が種の殻に当たり、この霊的殻が割れないかぎり、生命の木の芽という魂の光は出ないことになる。

世間一般の霊界修行というものは、魂を眠らせたまま魄という種の殻を一生懸命がいていくだけである。だからいつまでたっても生命の木は生え出さない。四魂をいくらかみがいても、直霊の奥の神界の命は目覚めない。神界に直結する人間の真の命を目覚めさせるためには、霊界という壁を突破しなくてはならない。つまり、魄という種の殻を割らなくてはならないのである。

人間の内に眠っている真の命を目覚めさせること、それが求道の第一段階である。この種が割れたとき、求道者は神界という世界の門に入ることになる。そしてそこから神界行が始まる。しかし現実的に言って、この霊界の壁を突破することは容易なことではない。現在世間で行われているのは、そのほとんどが現世利

益を目的とした靈界行であつて、筆者が本書で説く神界行とはその意味も目的も違ふということ、まず初めに言っておきたいと思う。